

(大正五年四月六日第三種郵便物認可) 昭和十二年四月廿五日印刷納本(毎月一回一日發行)

# 哲 學 研 究

第 二 十 二 卷 第 五 冊

第 二 百 五 十 四 號

昭 和 二 十 年 五 月 一 日 發 行



實踐と對象認識 (承前)

—— 歷史的世界に於ての認識の立場 ——

文學博士 西田幾多郎

カントの歴史觀……………文學士 内田文雄

プラトーンに於ける數學と形相論との關係

オットー・トエブリッツ  
長澤 信壽譯

京 都 帝 國 大 學 文 學 部 內 部

京 都 哲 學 會

## 京都哲學會規則

- 第一條 本會ヲ京都哲學會ト稱ス
- 第二條 本會ハ廣義ニ於ケル哲學ノ研究及其普及ヲ以テ目的トス
- 第三條 本會ハ前條ノ目的ヲ達センガ爲メ左ノ事業ヲ行フ
- 一、毎月一回研究會ヲ開ク
  - 一、毎年公開講演會ヲ開ク
  - 一、毎月一回哲學研究ヲ發行ス
- 第四條 本會事務所ヲ京都帝國大學文學部内ニ置ク
- 第五條 本會ノ事業ヲ經營スル爲メニ左ノ役員ヲ置ク
- 一、委員(若干名)京都帝國大學文學部哲學科教官及委員會ニ於テ推薦シタル者ヲ以テ之ニ充ツ
  - 一、書記(一名)委員會ニ於テ囑託ス
- 第六條 本會ノ趣旨ニ賛同スル者ハ何人ニテモ會員タルコトヲ得  
學校、圖書館、教育會、其他ノ團體ハ其團體ノ名ヲ以テ入會ス  
ルコトヲ得
- 第七條 會員ハ會費トシテ年四圓四拾錢、前後二期ニ分チテ前納  
スベキモノトス
- 第八條 會員ハ本會ノ諸種ノ會合ニ出席スルコトヲ得、且ツ雜誌  
『哲學研究』ノ配付ヲ受ク
- 第九條 本會規則ノ改正變更ハ委員會ノ決議ニ依ル

## 京都哲學會役員

### 委員

文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士			
天野貞祐	岩井勝二	植田壽藏	白井二尙	小島祐馬	木村素衛	九鬼周造	田邊一元	中井正一	西谷啓治	野上俊夫	羽溪了諦	波多野精一	服部英次郎	久松眞一郎	本田義英	山内得立

# 前 號 目 次

實踐と對象認識(承前)

—— 歴史的世界に於ての認識の立場 ——

..... 文學博士 西田幾多郎

カントの先天總合判斷の最高原則について..... 文學士 大西友太

感情の存在論的構造(承前)..... 文學士 島 芳 夫

十字架と薔薇——一つの解釋の試み..... 文學士 平下欣一譯  
ゲオルグ・ラッソン

會 告

- 一、本會へ入會希望者ハ京都市西洞院七條南内外出版印刷株式會社内京都哲學會宛テニ規定ノ會費(前表紙裏ニアリ)御納付ノ上御申込被下度候
- 二、會員ニテ轉居入退會等(編輯事務以外ノ一切)ノ事務ハ内外出版印刷株式會社内京都哲學會へ御通知被下度候
- 三、會費ハ振替口座大阪三〇六六三番 内外出版印刷株式會社内京都哲學會宛テニ御拂込被下度候
- 四、前金切レノ場合ハ帶封ニ「前金切」ノ印章捺致スベキニ付直ニ御拂込下サレ度候
- 五、本誌ノ編輯ニ關スル通信及紹介ノ新刊書・寄贈雜誌等ハ凡テ本會宛テニ御發送被下度候

京都帝國大學 文學部内 京都哲學會

註 文 規 定

- ◆ 會員ニあらざる購讀者ノ御註文及び廣告ニ關する件ハ内外出版印刷株式會社へ御申込下され度候
- ◆ 本誌ノ御註文はすべて代金郵税共前金にて御送り下され度候
- ◆ 振替貯金にて御送金の際ハ(振替京都三九三一番大阪三九三一番東京三九三一番) 内外出版印刷株式會社宛ニ願上候
- ◆ 特に請求書及領收書等を要する場合ハ郵券參錢御送付下され度候

定 價

冊 數	冊 定 價	郵 稅
一冊	金四拾錢	金壹錢
六冊(前金)	金貳圓四拾錢	不 受
十二冊(前金)	金四圓八拾錢	不 受

廣 告 料

一頁 金參拾圓 半頁ハ取扱不申

昭和十二年四月廿五日印刷納本  
昭和十二年五月一日發 行 第 二 百 五 十 四 號 第 二 十 二 卷 第 五 册

京都帝國大學文學部内

編輯者 京都哲學會

右代表者 服部英次郎

發行者 須磨勸兵衛

印刷者 須磨勸兵衛

印刷所 内外出版印刷株式會社

發 行 所

京都市下京區西洞院七條南

内外出版印刷株式會社

振替口座 京都三九三一番  
大阪三九三一番  
東京三九三一番

本社 京都市下京區西洞院通七條南入 内外出版印刷株式會社

賣 捌 所

(東京) 寶文館 北隆館 東文館 東海堂  
(大阪) 寶文館 上田屋 參文社  
(神戸) 寶文館 盛文館  
(京都) 大文社 川瀨書店

不許複製 禁轉載

松村克巳 著 (田邊 元 監修) (西哲叢書 第五册)

# アウグスチヌス

各 價 一・三〇 送 一・二四  
約 三三〇頁 口繪 一葉

## 新 刊

現代に於ける思想の無力、思想の貧困と云ふ事が屢々語られる。併し事實は正しくその反對である。思想は過剰であり、人々は思想の力を信じてゐるが故にこの嘆きがあるのである。問題は生命を賭して思想を生きたる人がない事である。眞實を語るのみではなく之を身を以て支へ證する人の少い事である。千五百年の昔、ロマ帝國の没落を眼前にしつゝ、新しき時代の産みの苦しみを親しく身に負ふて憐み思案した人、中世の歴史を叫び出した聖アウグステイヌスは、右の様な意味に於て最も深く歴史と永遠との底を潜つて眞理を生きた。個の天才と云へやう。その取上げた問題は或は時代の制約を受けて現代の其とは異なるとするも、此の人の巨大な魂の氣息が聞く事は、現代に生きる吾々にとつて多くの暗示を含んでゐるに違ひない。

本書は我が國に於てその名の語らるゝ、事屢々にしてその文獻に乏しきアウグステイヌスについての全般的な最初

の叙述である。

第一章 アウグステイヌスの生涯 一、出生 二、生立ち 三、カルタゴ遊學 四、第一の轉機—眞理への愛 五、タガステ時代 六、カルタゴ時代 七、懷疑—海を超えて 八、ロマよりミラノへ 九、明けの星 十、夜明け前—肉慾の繩目 十一、回心の直接動因 十二、ミラノの囿—回心 十三、カンキアクム時代 十四、受洗の後 十五、アフリカ歸還 十六、ヒッポの司教—社會の指導者 十八、ドナテイスト論争 十九、ペラギウス論争 二十、アウグステイヌスの諸書について 第二章 アウグステイヌスの哲學 第三章 アウグステイヌス哲學の諸問題 一、幸福 二、確實性 三、感覺 四、徹知的認識 五、徹知的認識の起源 六、光の説と内なる教師 七、魂の本性 八、神の認識 九、信仰と認識 十、愛の倫理 十一、惡の問題 十二、自由意志と罪 十三、恩寵と意志の自由 十四、神と世界 十五、歴史的社會 文獻

- 既 刊
- ★ヘーゲル 高山岩男著 ★ソクラテス 後藤孝弟著 ★ギンケルマン 井島 勉著
  - ★フツセル 下程勇吉著 ★シェリンガ 勝田守一著 ★ル ソ 烏 芳夫著
  - ★スピノザ 篁 實著 ★プラトン 長澤信壽著 ★メーヌ・ド・ピラン 澤瀉久敬著
  - ★マクス・シェーラー 田中 熙著

(大正五年四月六日)昭和十二年四月廿五日印刷納本(毎月一回) (第三種郵便物認可)昭和十二年五月一日發行

哲學研究 第二百五十四號 定價金四拾錢 郵稅金壹錢

東京市都司町丸太町 替振 都京一三五九 番  
東京市神田區河臺 替振 東京三五九〇九 番

弘文堂

